

難波西鶴と海の道

【58】

森田 雅也

前回は、西鶴の浮世草子『諸艶大鑑』(副題・好色二代男)、『貞享元(1684)年刊』巻七の二「勤めの身は狼の切り売りより」は「に描かれている「長崎の唐人様」という大金持ちの逸話でした。

島原遊郭で有名な村間(太鼓持ち)が話からは、京都から長崎への通い商いで大もつけた豪商の悪所(遊里)でのニックネームだったのですが、「唐人様」というネーミングが気になります。西鶴自身、俳諧仲間から、「阿蘭陀西鶴」と呼ばれて、

畏怖の念を抱かれていたことは、すでに述べました。このニックネームは、住吉神社で一昼夜に2万3500もの句を詠んだ俳人・西鶴の超人ぶりを指しています。

オランダ人は、毛が赤く、目が青く、背丈が高く、異常に大きいなど、当時は何事も日本人の規格から外れてみえていました。西鶴も当時では、日本人離れした、格別な存在であったわけです。

長崎貿易は、基本的には、オランダと中国相手の舶来貿易をさします。「唐人」とは、外国人一般を指すこともありますが、狭義では

中国人を指します。

「唐人」がどちらの意味にしても、舶来貿易で一財産を稼いだ大金持ちの「お大尽」を指したことは言うまでもありませんが、「唐人様」という呼び名には、日本人では並大抵ではない、大金持ちの中の大金持ちという意味が含まれていると言えます。

それでは、舶来品貿易というのは、そんなに富をもたらしたのでしょうか。長崎で求めた珍獣、奇鳥などでのもうけ話はすでに述べました。しかし、一般的な舶来品でも相当な高値がつきました。

『諸艶大鑑』巻五の二「四匁七分の玉もいたづらに」には、自己破産した富商が全財産差し押さえになりながら、ネコの首に高価な珊瑚玉を隠して持ち出した話があります。この品は、富商が全盛時に「長崎通ひの商人」より買収求めた、「天

舶来品好きの心つかむ

川」から渡来した舶来品でした。

「天川」とは「阿媽港」、現在のマカオを指しますが、当時すでにポルトガルの租借地です。この珊瑚玉の重さが「四匁七分(約17・6匁)」。そんな小さな玉が「銀三貫目(約600万円)」という高値で売れたというのです。

この珊瑚玉がいかなるものか分かりませんが、中国産あるいはポルトガル産、はたまた、はるか遠くの異国からマカオ、長崎を経由して渡来した舶来品の珍品であったことに間違いはないでしょう。

数十年前の日本人も、欧米の製品に卑屈なほど信奉しましたが、古代の『竹取物語』の5人の貴公子も姫のためながら、舶来品に手を出します。日本人は舶来品に弱いのですね。

(関西学院大学文学部文芸学言語学教授)

金持ちの中の金持ち「唐人様」